報道資料

京丹後市夢まち創り大学
今年度の計画について

令和３年８月２６日
京　丹　後　市

本市では、京丹後市夢まち創り大学事業として、参画大学と連携し市内各地域で大学生の地域活動の取組を支援しています。コロナ禍において大学活動が制限される中でも、活動内容を模索し、市内をフィールドに様々な取組を実施しています。ぜひ、活動を知っていただきたく、今年度の活動計画をお知らせいたします。

1. 京丹後市夢まち創り大学とは

平成２７年８月１日より事業を開始した京丹後市夢まち創り大学は、市内の地域課題の解決や地域の活性化を目的に、地域と大学が連携し活動を行っています。商品開発、祭の運営・参加、農法の構築からオリジナル米の生産、観光 PR 動画やパンフレットの作成などの活動を展開しており、過去参加大学・団体数は 18 大学 1 団体、のべ 8,155 人（令和３年３月 31 日時点）の学生がこれまで参加しています。

≪ 過 去 参 加 大 学 ・ 団 体 一 覧 ≫

- 立命館大学
- 龍谷大学
- 同志社大学
- 大手前大学
- 花園大学
- 高崎経済大学
- 京都大学
- 京都府立大学
- 京都産業大学
- 追手門学院大学
- 京都文教大学
- 佛教大学
- 大谷大学
- 京都外国語大学
- 流通科学大学
- iU 情報経営イノベーション専門職大学
- 京都橘大学
- 鳥取環境大学
- 関西学生放送連盟

地元食材を活用した商品開発

地域紹介パンフレットの作成

オンライン会議の活用

2. 今年度の当初実施予定プログラム一覧

今年度は１０大学（１８プログラム）が実施を検討しており、すでに龍谷大学や京都産業大学、同志社大学等の学生がフィールドワークを実施しています。その他、iU 情報経営イノベーション専門職大学による市内小学生に向けたプログラミング教室を開催するなど取組の幅を広げています。

No.	大学・学部	担当教職員	活動地域
1	龍谷大学　政策学部	谷垣岳人　准教授	大宮町三重・森本
2	龍谷大学　政策学部	金紅実　准教授	大宮町三重・森本
3	龍谷大学　政策学部	今里佳奈子 教授	丹後町宇川
4	龍谷大学　政策学部	石原凌河　准教授	大宮町口大野
5	龍谷大学　政策学部	只友景士　教授	大宮町
6	龍谷大学　政策学部	清水万由子　准教授	大宮町五十河
7	大手前大学　メディア芸術学部	谷村要　准教授	久美浜町蒲井・旭
8	大手前大学　メディア芸術学部	今福章代　教授	市全域（織物関連）
9	大手前大学　現代社会学部	本田直也　准教授	市全域
10	追手門学院大学　地域創造学部	安本宗春　講師 佐藤敦信　准教授	弥栄町和田野
11	京都文教大学	ﾌｨｰﾙﾄﾞﾘｻｰﾁｵﾌｨｽ事務局　小林大祐	市全域
12	佛教大学	大東貢生　教授	丹後町大山・豊栄
13	京都外国語大学（ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ観光学科）	岸岡洋介　講師	市全域
14	京都産業大学	焦従勉　教授 若狭愛子　准教授	峰山町
15	大谷大学　社会学部	鈴木寿志　教授	網野町
16	同志社大学	泉川大樹　講師	丹後町間人
17	iU 情報経営イノベーション専門職大学	桐谷　恵介　准教授	市全域
18	iU 情報経営イノベーション専門職大学	山内　正人　講師	市全域

3. その他

Facebook 等の各種 SNS アカウントや特設 HP の作成も予定しています。今後の各大学における取組やイベント実施情報については、これらの媒体での情報発信を行うと共に、報道資料の提供を行います。

【問い合わせ先】
京丹後市市長公室政策企画課
電話：０７７２-６９-０１２０

京丹後市夢まち創り大学事業とは

平成27年8月1日より事業を開始し、市内の地域課題の解決や地域の活性化を目的とした地域と大学とが連携した活動に対して、 市マイクロバスによる京都市内から地域までの無料送迎や活動中の宿泊場所（シェアハウス）の提供、活動のコーディネート等の支援を行っている。

これまでの過去参加大学・団体数は18大学1団体で、のべ8,155人（令和3年3月31日時点）の学生が参加している。

龍谷大学今里ゼミによる活動事例

①地域活動

地域づくり会議に運営スタッフとして地域活動に参加

→宇川つながるミーティング

浜掃除（上野高嶋海岸掃除）

金曜市手伝い

②3つのプロジェクト（パンフレットPJ、カレーPJT、木材プロジェクト）

宇川観光パンフレット（うかわたび）の制作、

イノシシカレーの缶詰「宇川をかける～山の見えるカレー」の商品化/販売

木工ワークショップイベント「気（木）になる宇川」の開催、竹プロダクトの製品化

③調査・研究・提言活動

獣害について調査研究を行い、宇川報告会において、獣害についてのアンケート結果の分析報告、地域主体の獣害対策政策案（合同会社「けものがたり」）提案

その他にも様々な大学が、祭の運営・参加、農法の構築からオリジナル米の生産、観光PR動画の作成などに関わり活動している。

今年度からの計画

令和3年度から京丹後市夢まち創り大学が取り組む5つの計画

＜京丹後市夢まち創り大学事業計画＞

（1）市内高校生等との連携による未来を担う人材の育成
→高校生と地域をつなぐ拠点となる施設
「京丹後市未来チャレンジ交流センター（roots）」と
連携し高校生×大学生によるプロジェクトを展開

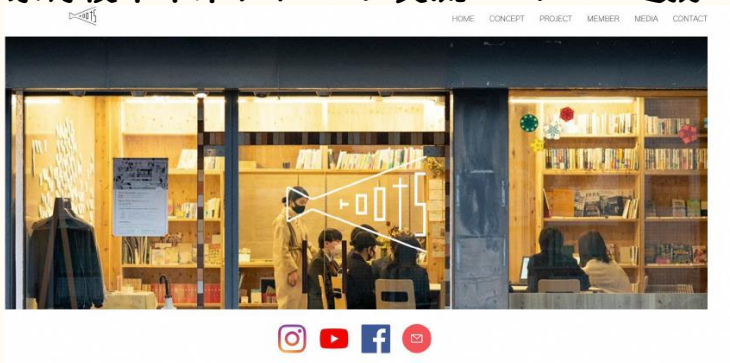
（2）新たなコミュニティづくりの推進
→学生がファシリテーターとして地域活動に参加し、
地域の課題解決や魅力の再認識を進めていく

（3）地域活動のサポート体制の強化
→新たに有限責任事業組合まちの人事企画室と連携
地域と大学の橋渡しを行い活動を更に充実化

（4）遠隔システムなどを用いた地域連携の展開
→Web会議ツールや映像を活用した遠隔での
地域連携活動をモデル的に展開

（5）継続的な関係人口の創出と大学間交流の充実
→WEB・SNS等を活用し、各大学の地域での取り組みの
情報発信などを行い、大学間での情報交流を行うと共
に、大学卒業後も学生が継続的に活動情報を見ること
ができ、関係を持ち続けられる仕組みを作る

京丹後市未来チャレンジ交流センターと連携



運営体制の強化
3つの運営体制で大学の活動をサポート

COLPU
Consortium for Local Public Human Resources Development

京丹後市

まちの人事企画室

今年度の活動計画

今年度は10大学18プログラムが夢まち創り大学での活動を計画

◆活動事例

＜京都産業大学　若狭ゼミ＞

峰山町を活動地として「こまねこ」と「丹後ちりめん」をキーワードに、丹後の人と猫とのつながりに思いを馳せて、京丹後市峰山町の街歩きを楽しむイベント、こまねこまつりの企画に関わり、イベントへの参画を通して地域を盛り上げる。地元の高校生とも連携。
9月18～19日にかけてフィールドワークを行い、祭りを盛り上げる。

＜龍谷大学大学　谷垣ゼミ＞

大宮町三重・森本地区を活動地として地域の自然資源の豊かさの指標としてゲンゴロウを活用し、ゲンゴロウと共生できるお米づくりに取り組んでいる。
コロナ禍でフィールドワークが制限される中、今年度も地域と連携し、水田の生き物調査などを実施。京丹後森本アグリ(株)と共に引き続きお米づくりを行い、9月以降には学生と共に稲刈りも予定している。

令和２年度

京丹後市夢まち創り大学

事業報告

京丹後市夢まち創り大学　令和２年度事業報告

【目次】

＜夢まちづくり大学活動実績＞
１-１　活動大学数
１-２　参加学生実績
１-３　バス利用実績
１-４　シェアハウス利用実績
１-５　拠点施設（旧郷小学校）利用実績
１-６　夢まちづくり大学学生証発行実績

＜大学等の市外の大学生を誘致した活動について＞
２-１　令和２年度プロジェクト計画一覧
2-2　各プロジェクトの取組み

＜夢まち創り大学活動実績＞

1 - 1　活動大学数

7 団体（12 プログラム）【前年】12 団体（24 プログラム）

1 - 2　参加学生実績（申請のあったもののみ集計）

人／日合計　　：123 人【前年】2,905 人　（算出方法：10 人が 3 日間活動した場合→のべ活動人数　30 人）

のべ活動人数　：193 人　【前年】997 人

のべ活動日数　：16 日 【前年】189 日

活動回数　　：11 回 【前年】63 回

1 - 3　バス利用実績

総利用回数　：　2 回（ 1 往復）　　【前年】89 回

総利用人数　：　22 人　　【前年】1392 人

コロナ禍により現地での活動数は激減した。感染状況が落ち着いた 10 月以降、感染対策をした上で、1 回の乗車人数を最大 11 人に絞り運行を再開した。

1 - 4　シェアハウス利用実績

	郷シェアハウス	久僧シェアハウス	湊宮シェアハウス	合計
総利用日数	0 日 (前年)48 日	3 日 (前年)30 日	0 日 (前年) 7 日	3 日 (前年)85 日
総利用人数	0 人 (前年)123 人	78 人 (前年)203 人	0 人 (前年)46 人	78 人 (前年)372 人

コロナ禍により現地での活動数は激減した。感染対策を考えると、対面で一堂に会しての利用は難しかった。

1 - 5　拠点施設（旧郷小学校）利用実績

拠点施設の利用については、今年度は報告はない。

1 - 6　夢まち創り大学学生証発行実績

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	教員・職員	合計
総発行数	5 人 (前年)40 人	38 人 (前年)135 人	22 人 (前年)125 人	1 人 (前年)10 人	4 人 (前年)4 人	70 人 (前年)314 人
累計発行数	1014 人 (前年まで)1014 人				54 人 (前年まで)54 人	1068 人 (前年)1068 人

1 - 7　電動自転車利用実績

総利用日数　：０日 【前年】78 日

総利用台数　：０台 【前年】93 台

今年度の電動自転車利用実績はない。

＜大学等の市外の大学生を誘致した合宿について＞

２-１．夢まちづくり大学プロジェクト計画一覧

今年度は大学の授業科目として活動したものが 12 プログラム計画された。昨年度から継続した活動が 10 プロジェクトであり、新規の活動が 2 プロジェクトであった。

令和２年度夢まち創り大学プロジェクト一覧

No.	新規 継続	大学	担当教員 担当職員	活動地域	活動概要
1	継続	龍谷大学	谷垣岳人 准教授	大宮町 三重・森本	・ゲンゴロウ郷の米の農法の手引書作成 ・ゲンゴロウ郷の米の認知度向上のための学内販売
2	継続	龍谷大学	今里佳奈子 教授	丹後町 宇川地域	・地域活動：浜掃除、金曜市手伝い ・宇川観光パンフレットの制作、イノシシカレーの缶詰の商品化/販売、木工ワークショップイベントの開催、竹プロダクトの製品化 ・地域主体の獣害対策政策案（合同会社「けものがたり」）提案
3	継続	京都産業大学	若狭 愛子准教授	峰山町	・京丹後市や峰山町の情報発信について学生の視点での検討を行い、SNS 特にインスタグラムの利用に改善の余地があるとこと指摘した。
4	継続	大手前大学	谷村要 准教授	久美浜町 蒲井・旭	・京丹後夢まち創り大学のホームページ案をほぼ完成させた。 ・2020 年 12 月 17 日には、久美浜町蒲井・旭地区の風蘭の館に行き、運営者と来年度の活動について相談した。また、学生の活動についても報告した。
5	継続	大手前大学	今福章代 教授	丹後ちりめん関係	・遠隔での京都府立織物・機械金属振興センターでの研修、事業所見学を行った。
6	継続	大手前大学	本田直也 准教授	京丹後市 全体	・集中講義型、合宿研修型の 2 泊 3 日サマーキャンプを郷地区を拠点として実施 ・ホームページの構成までは組みあがったが、一部コンテンツはじゅうぶんに完成できなかったが、谷村ゼミの学生が制作を引き継ぎ、ホームページをほぼ完成させた。
7	継続	追手門学院大学	安本宗春 講師 佐藤敦信 准教授	弥栄町 和田野	・コロナ収束後を見据え、より地域内外からの参加者を見込める朝市の模索
8	継続	龍谷大学	石原凌河 准教授	大宮町 口大野区	・大宮町の各区の防災担当職員に対してコロナ禍における避難所運営に関する講演会を企画 ・コロナ禍での避難所運営訓練のシナリオづくり ・口大野区の魅力を伝える冊子を発刊した。
9	継続	京都文教大学	福埜 裕	京丹後市 全域	・現地での実習は 1 日(日帰り)とし、京丹後市と大学内での GoogleMeet・Zoom などを活用したオンラインでの学習を実施。
10	継続	佛教大学	大東 貢生 教授	丹後町豊栄地域	・花いっぱいプロジェクトを中心としてアートリウム作成会 ・現地での活動やオンライン活動において提案、成果報告会を実施
11	新規	龍谷大学	清水万由子准教授	大宮町 五十河地域	・五十河地域５地区の若手住民を対象として開催されたワークショップにて、住民が感じている集落の現状と課題についての話し合いに学生が参加した。 ・記録作成や集落地図を行い、話し合いの進行を補助した。
12	新規	大谷大学	鈴木 寿志 教授	京丹後市網野町	・小浜における清掃活動とペットボトルの国籍調査。 ・海中浮遊、海浜砂中、魚内臓中のマイクロプラスチックの調査。

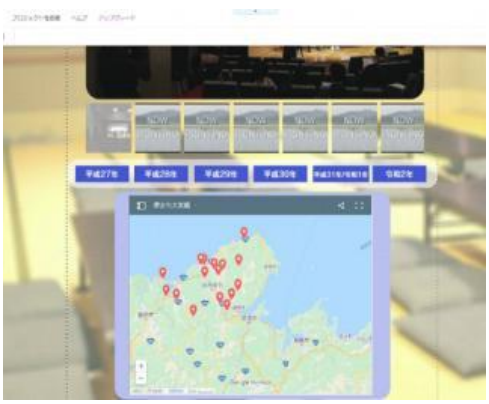
2-2 プロジェクトごとの取組詳細

取　組　番　号	1
大学名・科目名	龍谷大学政策学部(三重森本プロジェクト)
教員名・担当者名	谷垣岳人 准教授
対　象　地　区	大宮町三重・森本地区
活　動　年　数	6 年目（平成 27 年度～）
目　的　・　趣　旨	地域住民と連携して、地域の自然資源の再発見、再評価を行う活動を通して地域農業、地域社会の活路を見出す。
活　動　概　要	2020 年度前期は、大学と地域をつなぎオンライン会議および中間報告会を行った。後期は、水田に併設した生物の避難場所「ひよせ」の役割を調べるため現地で生物調査を行った。地域住民自らが生物調査できるように「生物調査シート」を試作した。ゲンゴロウ郷の米の農法に関する手引き書を作成した。ゲンゴロウ郷の米のパッケージ改善や販路拡大のため消費者を対象としたアンケート調査を行った。また、ゲンゴロウ郷の米の龍谷大学内での認知向上のため教職員を対象とした学内販売を行った。2020 年 12 月には他のプロジェクトと合同で大学と地域をつなぎオンライン報告会を行った。2021 年 2 月には大学と地域をつなぎ最終報告会を行った。
活　動　成　果	コロナ禍中であったが大学と地域をオンランインでつなぐことで例年通りの意見交換や成果報告ができた。また現地訪問時は、龍大の学生・教員全員 PCR 検査の陰性を確認してから実施したが、例年のような協働での活動は控えた。生物調査シートや手引き書の作成により、ゲンゴロウ郷の米に新規に取り組み易くなった。ゲンゴロウ米の生産に取り組む地域の農家の方が地域の小学校や保育園に対して、環境保全型農業に関する出前講義を実施するなど地域の変化が見られた。今後、児童や園児を招き、協働で水田の生き物調査などを実施したい。
関係人口に関する効果	これまで本科目を受講した学生は京都・大阪など都市圏出身の学生が多く、京丹後市に複数回行くことによって、中山間地域の現状を認識し、地域課題の解決に向けた活動への関心が高まってきている。こうした中で、学部全体で京丹後市の認知度が年々向上してきている。

取　組　番　号	2
大学名・科目名	龍谷大学　政策学部「今里佳奈子ゼミ」
教員名・担当者名	今里佳奈子　教授
対　象　地　区	丹後町宇川地区
活　動　年　数	6 年目（平成 27 年度～）
目　的　・　趣　旨	龍谷大学今里ゼミは、京丹後市宇川地区をフィールドに、「持続可能な地域社会のあり方」について自治・協働の観点から研究し、実践するゼミである。 活動の目的・ねらいは 3 つある。 ①具体的な地域活動を通して、地域に貢献すること。 ②地域と協働しながら、持続可能な地域社会に向け、課題解決型プロジェクトを進めること。 ③調査研究活動を通して、持続可能な地域社会のあり方について研究、提言すること。
活　動　概　要	①地域活動：地域づくり会議に運営スタッフとして参加（宇川つながるミーティング（2 回）、また、制約のある中、浜掃除（上野高嶋海岸掃除）、金曜市手伝いなどの地域活動にもとりくんだ。 ② 3 つのプロジェクト（パンフレット PJ、カレーPJT、木材プロジェクト）を進め、宇川観光パンフレット（うかわたび）の制作、イノシシカレーの缶詰「宇川をかける～山の見えるカレー」の商品化/販売、木工ワークショップイベント「気（木）になる宇川」の開催、竹プロダクトの製品化を行った。 ③調査・研究・提言活動：獣害について調査研究を行い、宇川報告会において、獣害についてのアンケート結果の分析報告、地域主体の獣害対策政策案（合同会社「けものがたり」）提案した。
活　動　成　果	★5 年間の宇川地域での活動により、地域の方々に広くゼミのことを知ってもらい、信頼を得ている。 ★令和 2 年度は、週 1 回のオンライン会議や地域の方達からお話を聞く「リレー講義」、ハイブリッドの宇川つながるミーティングなど、新たなツールを用いて調査・研究交流活動を展開することができた。 ★害獣を地域資源としていかす「イノシシカレー」の缶詰商品化、観光パンフレットの作成など、新型コロナのために活動に制約がある中でも目に見える成果を残すことができた。
関　係　人　口　に	★大学では、文献、資料を読み、宇川・京丹後研究を行った。

関する効果	★2020 年度は現地にはなかなか行けなかった、資料調査を重ね「宇川報告書」を作成。また、買い物アンケートの分析、獣害の調査を行うことで、地域への理解を深めると共に、課題の発見、解決策を探究した。 ★これらを通じ、参加者は、宇川・丹後町・京丹後市についての理解を深めると共に、「京丹後」に対して特別な想いを持つようになっている。

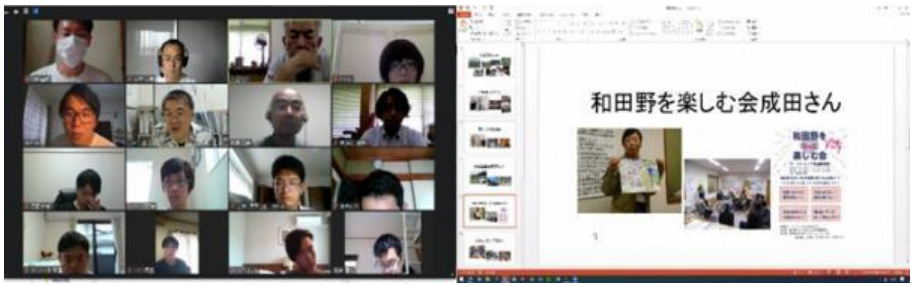
取組番号	3
大学名・科目名	京都産業大学　　フィールドリサーチ
教員名・担当者名	若狭　愛子　准教授
対象地区	峰山地区（こまねこ祭実行委員会）
活動年数	２年目（令和元年度～）
目的・趣旨	学生が行政及び住民との協働による地域づくりを体験する機会として、フィールド・リサーチの受講生が京丹後市峰山町の現地調査と持続可能な地域づくり提言を行う。
活動概要	コロナ禍で、予定していた「こまねこまつり」には参加できなかったが、京丹後市や峰山町の情報発信について学生の視点での検討を行い、SNS 特にインスタグラムの利用に改善の余地があると指摘した。
活動成果	インスタグラムの改善策とそれを活用した地域活性について、学内の発表会で報告を行った。
関係人口に関する効果	昨年度は現地調査がままならなかったが、ＨＰなどの情報発信の在り方などについて他の市町村と比較調査し、また実際に学生が個人で現地を訪問し街歩きをした実感から、魅力の発信の仕方などに地域活性の可能性があることが判明した。

取　組　番　号	4
大学名・科目名	大手前大学　メディア芸術学部　　谷村要ゼミ
教員名・担当者名	谷村要　准教授
対　象　地　区	久美浜町蒲井・旭地区
活　動　年　数	7 年目（平成 26 年度～）
目　的　・　趣　旨	久美浜町蒲井・旭地区における地域活性化に、「メディアを学んできた」という専門性をどのように活かしていくか。これが谷村が指導するゼミがこの地区に関わる際のテーマである。毎年、アプローチを変えながら「学生の成長」とともに地域に資する活動を模索している。
活　動　概　要	夏季集中授業「地域貢献　PBL」で作成した京丹後夢まち創り大学のホームページ案を、その授業にも参加していた 4 年ゼミ生がブラッシュアップし、ほぼ完成させた。 2020 年 12 月 17 日には、久美浜町蒲井・旭地区の風蘭の館に行き、運営者と来年度の活動について相談した。また、学生の活動についても報告した。 
活　動　成　果	学生を連れて地域を訪問することが一切できなかったため、毎年実施していた映像撮影やイベント運営がまったくできなかった。活動の成果としては、京丹後夢まち創り大学のホームページ案があるが、その地域報告は市職員などに次年度報告したい。
関係人口に関する効果	阪神間にある都市型大学に通っている学生にとっては、地方のリアル（特に地理上の不便さ、人口減少・少子高齢化）を目の当たりにすることで日本社会の持つ深刻な課題に気づくきっかけとなっている。一部の学生は、この問題意識をより深める方向に自身の研究を進めたり、地域の方々との授業外での交流につながるようになった。

取　組　番　号	5
大学名・科目名	大手前大学　メディア芸術学部　　今福章代ゼミ
教員名・担当者名	今福章代　教授
対　象　地　区	京丹後市丹後織物関係
活　動　年　数	4 年目（平成 29 年度～）
目　的　・　趣　旨	【インターンシップ】※2018 年度からの継続 ・染色工芸を学ぶ学生達が、京丹後市の織物産業の事業所各社にてインターンシップを行う。 【丹後ちりめん活性化プロジェクト】※2017 年度からの継続 ・京都府織物・機械金属振興センターにて研修を行い、京丹後市の織物関係の事業所を数カ所見学。 ・研修と見学を通して丹後ちりめんを中心とする京丹後市の織物産業について深く学び、学生の視点で商品企画を考え、京丹後市内でプレゼン及び学生と事業所や地元の方とのディスカッションの場を持つ。可能であれば京丹後市の事業所と共同開発を行う。学生視点の商品開発から丹後ちりめんの活性化を目的とする。 上記 2 点の活動を踏まえて、京丹後市のモノづくりの魅力を伝え、希望者があれば就職に繋げる。また、和装業界やデザイン企画に就職する学生もいるため、将来的に、京丹後市の織物産業と仕事で繋がる契機となる。
活　動　概　要	・11 月に教員他 3 名でゼミナールの学生たちには遠隔での京都府織物・機械金属振興センターでの研修、事業所見学を行った。 ・昨年度は新型コロナウイルスの影響で、インターンシップは行うことができなかった。しかし、学生たちの中には、インターンシップや現地での研修を強く希望する者が 4 名いたため、遠隔での研修に、公共交通機関を使用し、実費で宿泊して参加することを認めた。そのうち 2 名は京丹後市での就職を希望しており、現在、個別で就職活動を行なっている。
活　動　成　果	インターンシップは行えなかったが、遠隔や現地での研修及び事業所見学で、丹後縮緬について学ぶこ

	とができ、学生たちの大きな学びとなった。学生一人は積極的に京丹後市での就職活動を行なっており、自分で、３月にインターンシップに行くことを決めている。また、もう１名も織元と就職について相談をしている状況である。 2019 年度にインターンシップに参加した学生一人が、与謝郡与謝野町の織元に就職が決まった。丹後の織物産業やものづくりの姿勢に興味を持っている学生がたくさんいる。丹後ちりめんを中心とする丹後織物の中に、若い感性が入ることで活性化することを願う。
関係人口に関する効果	学生たちは遠隔もしくは現地での研修、事業所見学を通して丹後ちりめんについて深く学習し、京丹後市における織物産業の現状を理解した。日本の染織産業に於いて、丹後の織物が重要なポジションに位置していることを考え、自分たちにできることは何か、考えるきっかけとなった。

取　組　番　号	6
大学名・科目名	大手前大学　地域貢献 PBL
教員名・担当者名	本田直也　准教授
対　象　地　区	京丹後市内全域（オンライン）
活　動　年　数	3 年目（平成 30 年度～）
目　的　・　趣　旨	所属学部、専攻、学年が混在する多様な学生たちから編成される 20 人のクラスにて、フィールドワークを伴う課題解決型学習、プロジェクト型学習を行う。様々な経験の違いと専門性の違いをうまく融合しながら、チームビルディングを通して課題解決を行う。 専門性は、メディア系、社会科学系、情報技術系、芸術系、人文系など幅広く、大学で学んだそれらの力を活かしながら多様な地域の課題解決に挑戦していく。
活　動　概　要	集中講義型、合宿研修型の 2 泊 3 日サマーキャンプを郷地区を拠点として実施し、地域と地域貢献活動に関する情報収集を行った。2019 年度の課題は、今後地域貢献活動をスムーズに行うための情報収集と情報整理、情報発信をテーマとし、ドキュメント制作、Web 発信などに着手したが、コンテンツのクオリティの問題など、積み残された課題は多く残された。2020 年度は京丹後市を訪れることが難しくなったため、その課題解決を目的として授業を実施した。ホームページの構成までは組みあがったが、一部コンテンツはじゅうぶんに完成できなかったが、谷村ゼミの学生が制作を引き継ぎ、ホームページをほぼ完成させた。
活　動　成　果	2020 年度テーマは 2019 年度の課題を引き継ぎ、京丹後市全域でのこれまでの地域貢献活動の把握と今後の活動に役立つ情報発信をテーマとした活動を進めた。グループワークを通じてコンテンツを制作し、情報発信 Web サイトの試作品を制作した。
関係人口に関する効果	参加する学生たちにとって、知らない、イメージの沸かない京丹後市から、繰り返し訪れて何かに取り組みたいという気持ちへと変わっていった。自然溢れる中での新鮮な活動や、何もないからこそ何かに集中して打ち込める場に興味を持ち、一部の学生たちは繰り返し研修に参加したり、西宮に持ち帰って地域貢献の課題に取り組む姿勢へと変化しつつある。

取　組　番　号	7
大学名・科目名	追手門学院大学　地域創造学部「地域創造実践演習」
教員名・担当者名	安本宗春　講師、佐藤敦信　准教授
対　象　地　区	弥栄町和田野地区
活　動　年　数	３年目（平成 30 年～）
目　的　・　趣　旨	コロナ収束後を見据え、より地域内外からの参加者を見込める朝市の模索
活　動　概　要	春学期全てがオンライン授業ということもあり、教員が学生と会ったことが無く、活動は、手探りで模索しつつ、オンラインツール(Zoom)の活用を進めていった。また、一人ひとりの学生が話せないこと、現地に訪れておらず実態がわからないことからテーマをつかみにくいといった課題を感じた。そのような課題などから、秋学期では、②ふるさとの検討、③卒業制作の作成（オンライン交流のあり方）、をテーマとした。 
活　動　成　果	リモート交流によって移動にかかる時間がなくなり、学生と和田野区双方の時間さえ合えばいつでも交流することができるようになったことである。このことは、学生と地域の距離を縮める可能性を持っている。地域連携活動において、学生が連携先地域を身近に思うのは、その活動の継続を図る上では非常に重要になる。今後は、和田野区を訪問し、直接同区の良さを感じ取り、潜在的発展可能性を探るとともに、それ以外の時でも随時リモート交流を図るなど、両者の良さを同時に取り入れるハイブリッド型活動をさらに検討していく必要がある。
関　係　人　口　に	2020 年度は、すべてオンラインによる交流であり、地域に対する理解を深めていくには、限界があると

関　す　る　効　果	感じた。実際に地域に訪れることは、学生自身が地域に対する理解を深めるモチベーションを高めることにつながると思う。

取　組　番　号	8
大学名・科目名	龍谷大学　政策学部　　政策実践・探求演習ＩＡ（国内）
教員名・担当者名	石原凌河　准教授
対　象　地　区	大宮町口大野地区
活　動　年　数	３年目（平成 30 年度～）
目　的　・　趣　旨	未曾有の大災害が全国各地を襲い、自然災害による被害が後をたたない。持続可能な地域づくりを考える上で、地震や風水害への備えを平時から検討することが不可欠である。そのためには、防災や復興に関する専門知と大学生等の若手人材を有する大学と、防災活動に関心があるフィールドを有する地域とが連携して取り組むことが有用である。大学側においては、大学生自身が地域に継続的に関わることで、地域防災活動の担い手としての素養を育成することを狙いとする。
活　動　概　要	大宮町並びに口大野区の地域防災力と魅力向上を目的に、大宮町の各区の防災担当職員に対してコロナ禍における避難所運営に関する講演会を企画するとともに、コロナ禍での避難所運営訓練のシナリオづくりと実施した。また、口大野区の住民（区長、U ターン者、若者など）６名からオンラインでオーラルヒストリー（人生史）を伺い、その内容を編纂し、口大野区の魅力を伝える冊子（Life is 口大野）を発刊した。
活　動　成　果	大学生が地域に入り、地域の方々と交流する中で、地域の方々は、若者・外部の視点から地域を知ることができ、普段とは異なる視点から地域を捉えられたと考えられる。 コロナ禍での避難所運営訓練のシナリオづくりや口大野区の魅力を伝える冊子の配布を通じて、地域の課題に気づき、対策や意識向上の必要性の啓発につながった。こうした取り組みを通して、地域の防災力向上に寄与したと考えられる。
関係人口に関する効果	当初は京丹後市を単なる田舎の一地域として捉えていたものが、関わりが深まるにつれて、京丹後市の具体的な地名や関わっている人々などの具体的な名称が聞かれるようになった。また、当初は京丹後のイメージが思いつかない参加者も多かったが、活動を通じて、多くの参加者が京丹後市を「第二の

	故郷」として捉えるようになった。

取　組　番　号	9
大学名・科目名	京都文教大学　　プロジェクト科目（地域）
教員名・担当者名	ﾌｨｰﾙﾄﾞﾘｻｰﾁｵﾌｨｽ事務局
対　象　地　区	京丹後市全域（丹後機械工業協同組合）
活　動　年　数	４年目（平成 29 年度～）
目　的　・　趣　旨	本学は 2019 年 5 月に内閣府「地方と東京圏の大学生対流促進事業」に東京圏側の淑徳大学と埼玉工業大学と協働で採択された。これを受けて「産官学民「ともいき学習」による持続可能な地域社会創造人材育成」プロジェクトを展開しており、2019 年度より上述の学生も含めたプログラムを京丹後市をフィールドとして実施している。プログラムでは、京丹後市をフィールドとして「地方」の現状を把握し、自身が普段生活するコミュニティとの比較をし、行政、産業、教育など社会生活における課題や状況を俯瞰的に捉えることができる能力を身につけることを目的としている。
活　動　概　要	2017 年～2019 年初夏に年 1 回実施した 2 泊 3 日程度の「企業見学＋ラジオ番組制作」を核としたプログラムをベースに、京丹後市担当者による市の概況、課題、政策等のレクチャーや、移住希望者の支援を行う団体、ならびに移住者へのインタビュー、地元高校生とのまちづくりに関するワークショップを 4 泊 5 日の行程で実施する。 2020 年度は、上記工程で実施予定であったが新型コロナ感染症の情勢を踏まえ、現地での実習は 1 日(日帰り)とした。その他の行程は職員が現地に赴き、京丹後市と大学内での GoogleMeet・Zoom などを活用したオンラインでの学習を実施した。
活　動　成　果	「ラジオ」班では、NPO 法人京丹後コミュニティ放送との協力により、授業を通じて知り得た「京丹後の魅力」をリポート・録音し、その内容を「花よりたんご」(FM たんご(79.4 MHz))にて 2021 年 3 月 23 日、3 月 25 日、3 月 27 日の 3 回放送いただいた。 「くらし」「しごと」班では、丹後機械工業協同組合、丹後暮らし探求舎より提供された課題を解決するため、グループワークを行い、内容を深堀することで地域課題(地域が求めていること)が一層明確になっ

	た。また、プログラム最終日に成果報告会を実施し、京丹後市の方々に参加していただくことで、課題へのフィードバックができた。
関係人口に関する効果	企業やそこで働く人たち、そして社長から直接経営理念などの話を伺うなど「地元の人」との交流を通じて、京丹後市でどのような人たちが生活しているのかを実感できたのではないかと考える。また、その中には本学卒業もおり、同じ大学の先輩として、また京丹後の「地元の人」として話をしてもらうことで、より実感が得られたと思う。

取　組　番　号	１０
大学名・科目名	佛教大学「グローカル人材 PBL」
教員名・担当者名	大東貢生　教授
対　象　地　区	京丹後町大山・豊栄地区
活　動　年　数	２年目（令和元年度～）
目　的　・　趣　旨	地方創生の必要性が叫ばれる中、持続可能な地域づくりの実現には、多様なステイクスホルダーが一体となり経営の視点を持ちながら、実践的な取り組みを行うことが重要である。この活動は、地域（豊栄連合区、まちづくり委員会）、企業（野木源、岩木ファーム、いちがお畜産）、大学が一体となり、地域課題の解決に取り組むものである。この取り組みを通して、大学側では地域社会に根付きつつ、グローバル経済の荒波を読み切る能力を持ったグローカル人材の育成を目指し、地域側では H31 年度末で廃校になった小学校を活用した地域振興を目指していく。
活　動　概　要	5～7 月：豊栄地区まちづくり委員会とオンラインで打ち合わせを行い、商品開発・魅力発信・花いっぱいの 3 つのプロジェクトに分かれ、豊栄地域で何ができるのかについて話し合いを行った。 ８月：花いっぱいプロジェクトを中心としてアートリウム作成会をオンサインで行った。 ９・10 月話し合ったことに基づき、プロジェクトごとに提案を検討した。 11 月：現地にてプロジェクトごとに活動を行った。また豊栄地区文化祭にて中間報告を行った。 12・月：中間報告に対する意見に基づき、提案の改善を行った。 2 月：成果報告会をオンラインで行い、学生の提案に対する意見をいただいた。
活　動　成　果	①豊栄地域に大学生（都会の若者たち）が入り込むことによって、特に地域に居住する若手が豊栄地域の未来を考えて、商品開発・魅力発信・花いっぱいの 3 つのプロジェクトを発足させ、学生の提案を受けつつ、柿の加工品の商品化、自転車での観光案内、金木犀の植樹等に取り組んだ。 ②学生の活動と同時進行して立ち上がった豊栄地区まちづくり委員会が、学生の提案を受けつつ、地

	域計画（まちづくりヴィジョン）作成に取り組んだ。
関係人口に関する効果	京丹後市の産業を見ることで、学生は地方には地方独自の産業の活性化や生き残りの方法があり、地方から世界へとつながる活動について理解が深まった。同時に、都市部とは異なる地方での生活について体験を行い、学生から見た地方の問題についても認識を新たにした。

取　組　番　号	11
大学名・科目名	龍谷大学　五十河プロジェクト
教員名・担当者名	清水　万由子　准教授
対　象　地　区	大宮町五十河地域
活　動　年　数	5 年目（平成 28 年度～）
目　的　・　趣　旨	人口減少による集落機能維持上の課題について、地域住民同士で理解を深め、具体的な対策について話し合う
活　動　概　要	五十河地域 5 地区の若手住民を対象として開催されたワークショップにて、住民が感じている集落の現状と課題についての話し合いに学生が参加した。記録作成や集落地図を行い、話し合いの進行を補助した。
活　動　成　果	人口減少の進行が深刻な地区で、強い危機感を持つ若手住民が具体的な地域の現状や将来について話し合う場をつくることができた。新型コロナウィルス感染拡大により計画されていたワークショップが開催できなかったが、次年度も継続して話し合いを行う予定が確認された。
関係人口に関する効果	参加前は、京丹後市の場所を知らない者がほとんどであったが、実際に京丹後市へ行き、地域住民との話し合いの機会を持つことで、地域の暮らしのイメージを具体的に持てるようになった。

取　組　番　号	１２
大学名・科目名	大谷大学
教員名・担当者名	鈴木　寿志　教授
対　象　地　区	京丹後市網野町
活　動　年　数	１年目（令和２年度～）
目　的　・　趣　旨	１）海浜漂着プラスチックごみ問題の現状を把握し、解決策を考える。 ２）地元の方々と協力し、海岸の清掃活動を行い、網野町の海浜環境を改善する。
活　動　概　要	9 月 14 日と 12 月 10 日：小浜における清掃活動とペットボトルの国籍調査。 11 月 5 日：１）海中浮遊マイクロプラスチックの調査。２）海浜砂中のマイクロプラスチック調査。 ３）魚内臓中のマイクロプラスチック調査。
活　動　成　果	小浜謙マブ川河口に累積していた漂着ゴミはかなり除去され、環境が改善しつつある。海浜砂体を１m掘り、砂体内部のマイクロプラスチックを調べた結果、砂体深部にはマイクロプラスチックはほとんど含まれていなかった。遊漁港で釣った魚２匹の内臓からプラスチック片が検出された。
関係人口に関する効果	これまで京丹後市網野町を訪れたことのある学生はほとんどいなく、町のことを知り、親しみを持って接する学生が増えた。